



# 弘大農学生命科学部 同窓会会報

第32号

平成26年6月発行  
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会  
TEL 0172-36-2111  
FAX 0172-39-3750  
振替 02340-7-564  
印刷 (株) 笹 軽 印刷



同窓会・大学学部関係者の皆さん

60周年記念事業へのご協賛を

—— 懇金は一口5千円から ——

同窓会長 三 上

たつみ  
巽

## 学部創立は昭和30年7月

同窓会並びに大学・学部関係者の皆さん。私共の母校・弘前大学農学生命科学部は前身の農学部が昭和30（1955）年7月1日に、青森県内のりんご生産者を始めとする学部創立を懇請しての貴重

な寄附協賛金を基に、これに呼応・賛同された青森県・市町村・農業団体等の並々ならぬご尽力により単独の学部生誕の慶事を見るに至ったのであります。

その後、平成9（1997）年10月に学内改革による農学生命科学部への改組・移行を経て、明・平



お世話になりました。学部のバスも引退を迎えました。

成27年度には創立60周年という記念すべき大いなる節目の年を迎えるところとなりました。

### 記念式典は平成27年7月4日

この間、歴代学部長を始めとする教職員等大学当局・地元関係者の方々のご尽力ご支援、並びに何よりも忘れてならないのは卒業・終了後、鋭意精励努力され地域並びに関係分野に寄与・貢献なされた6千9百余名の学部同窓生、9百数十名の大学院修了生の皆さん方の取り組み姿勢・実績が、結果として私共の母校である弘前大学農学生命科学部の評価を相応のものにあらしめている要因の一端ではないかと推察し、謙虚な志を旨としつつも共に認め合えれば幸甚ではないかと考えているところであります。

このような状況を踏まえ私共同窓会は、このたびの学部創立60周年を更なる契機に、農学生命科学部が名実ともに地域に貢献し他に誇り得る学部として前進・飛躍する期待・願望を込め、このたび佐々木長市学部長を始めとする大学学部当局並びにPTA的組織である「学部後援会」と一体となり、「弘前大学農学生命科学部創立60周年記念事業」を実施することに致しました。

記念式典及び記念講演並びに記念祝賀会は平成27年7月4日(土)大学構内の「50周年記念会館

“みちのくホール”等で実施することに致しました。

### 記念事業へのご協賛を

記念事業の計画骨子と致しましては

- I 創立60周年記念式典・記念講演・記念祝賀会  
(協賛目標額100万円)
- 記念式典：平成27年7月4日(土)13時より  
弘前大学50周年記念会館にて
- 記念講演：式典終了後、同会場にて
- 記念祝賀会：16時～弘前大学学生会館にて
- II 創立60周年記念誌の刊行(協賛目標額80万円)
- III 学生海外研修支援(協賛目標額50万円)
- IV 教育備品の整備支援(協賛目標額70万円)

以上、このたびの記念事業実施に伴う醸金協賛目標額の総額を300万円と計画させて戴きましたが、この目標額確保に向けて同窓生並びに大学学部関係者の皆様方のご協賛の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

なお、3口(1万5千円)以上ご協賛の方には記念誌の進呈及び記念祝賀会への参加は無料とさせていただきますことと、事業への協賛依頼の趣意書等については別途封書により各位あてお届けさせて戴きますことを併せて申し添えさせていただきます。

## 祝、学会賞受賞!!

本学部の4名もの先生方が学会賞を受賞されました。おめでとうございます。

杉山 修一 先生(生物学科)	日本草地学会賞
原田 竹雄 先生(生物資源学科)	日本育種学会賞
比留間 潔 先生(生物資源学科)	日本応用動物昆虫学会賞
前多 隼人 先生(生物資源学科)	日本油化学会進歩賞



## 学部のミッションの再定義と 学部創設60周年記念事業の取組み

農学生命科学部長 佐々木 長 市

同窓会会員ならびに関係の皆様方におかれましては、平素より学部に対するご協力等に対し心より感謝御礼申し上げます。地域との関係が重視される地方大学としては、同窓生の忌憚のないご意見が貴重な改善情報になり、良い学部づくりには欠かせないことと思っております。

弘前公園の桜祭りは例年どおり4月23日から開始となり、同日に開花宣言もなされるという極めて珍しい年となりました。このような年は、42年ぶりという新聞報道がなされております。同窓生にとっては懐かしい弘前公園の思い出がよみがえってくるのではないのでしょうか。

さて、昨年は、文部科学省（文科省）よりミッションの再定義という宿題を出され、学部としてこの対応におわれた一年でした。この概要と、来年は学部創設60周年となりますので学部としての取組みを報告したいと思います。

平成24年に文科省より学部のミッションの再定義が求められました。国立大学法人として、役割の再確認を通じた機能の再構築と強化により、社会改革のエンジンという能動的な役割を果たすことが求められております。このような背景のもとに、各大学の各学部はその機能の再確認と強み・特色を社会にわかりやすく発信する必要性に迫られております。平成16年に国立大学が法人化されて以降の各大学の拡大した自律性を活用し、特色ある教育研究を一層推し進めることを期待されている取組みです。弘前大学は、地域の中核大学として、地域のニーズに応じた人材育成と地域のシンクタンクとして、様々な問題を解決する地域活性化機関としての役割を果たすという大学の方向性が確認され、これに対応する形で学部の見直しが進められました。

昭和30年、「青森地域の生物産業の振興に寄与できる高次な人材養成と研究開発」を目的に農学部が設置されました。ミッションの再定義では、

育成する人材像を食料生産や生物資源の開発というこれまでの役割から、農業のグローバル化に対応できる経営能力を併せ持つ人材育成としております。教育改革の方向は、「農業関係機関や地方自治体と地域課題の解決を進める」とし、研究の推進は、「未利用の地域資源の開発、白神山地の研究そしてりんごなどの農畜産物の高品質化」などとしております。当然、産業界や地域社会への貢献も大きな柱です。このことを、エビデンスを示しながら文科省に説明し、この3月に各大学の特色・強みを活かした機能強化が認められました。続いて、これに基づいた組織改革が各大学に求められています。新しい大学院が発足し、1回生が今年の春に社会に出たばかりですが、このミッションの再定義にもとづき、組織を見直すという形で農学生命科学部も組織改革に取り組んでおります。そのため各種資料の収集を求められております。その際には同窓会の皆さんのご協力を宜しくお願い申し上げます。

来年は、学部創設60周年になります。創設以来、ほぼ10年ごとに記念事業を実施してきております。50周年は、多くの同窓会会員や関係の皆様のご多大なご協力とご寄附のもとに各種記念事業を盛大に実施しました。ご協力ありがとうございました。平成27年7月4日（土）には、学部創設60周年記念事業を実施する計画です。既に、同窓会及び後援会と一緒に60周年記念事業実施委員会を立ち上げ、事業内容を検討しております。今回は、これまでの10年の記録を残すとともに、学部の還暦を祝う形で開催したいと考えております。60周年記念事業としては、記念式典ならびに祝賀会、同窓会員あるいは関係する方による記念講演、60周年記念誌の刊行、学生の海外研修補助などを計画しております。近日中に、会員の皆様には趣意書及びご寄附の依頼が届くと思います。学部の記念事業に対し、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

## 定年退職教員からの寄稿～1



## 学部での17年を振り返る

生物学科 佐原 雄二

私が弘前大学に赴任したのは1978年4月1日のことです。爾来まるまる36年を弘前大学のお世話になって過ごしてきました。もともと、赴任したのは学部でなく教養部で、そこで19年間を送り、農学生命科学部創設の際にスタッフの一人として加わったのです。

それ以来、学科長を都合4回務めました。振り返ると、学科長を務めたどの年度も個人的には大変な年だったことが思い起こされます。最初は新学部の発足（ほぼ）直後でした。同じ大学内に居たとはいえ、長らく他部局暮らしだった私には新学部の人たちの名前と顔がよく分かりません。その上、私には「学部」も「学科」も「講座」も未経験でした。まごつくことばかりで学科長の1年を終えたときは正直ほっとしました。

2回目の学科長のさいには、学部では初めて「保護者懇談会」や「成績表の保護者への通知」を行うことになりました。これは、担当した教務職員にはずいぶん大変な仕事だったと思います。保護者懇談会は秋の大学祭の時期に合わせて行うのですが、折悪しく、闘病中だった私の義理の父母がこのころ相次いで他界しました。保護者懇談会に出て保護者の皆さんに挨拶し（「にこやかに」挨拶できたかどうか？）すぐに帰宅して喪服に着替え、深夜バスに乗って上京してそのまま義父の葬儀に出たことを憶えています。

3回目の学科長を務めている年度には、私自身の父親が他界しました。年度末の諸行事を前にし

た1月19日のことです。朝に遺体の枕元で線香をあげ、すぐに大学に来て学科の用を済ませてから今度はお寺や葬儀会場との打ち合わせに行きました。この慌ただしさには故人もきっと苦笑しているに違いないと思いました。これも忘れられない年度となりました。

4回目の学科長は、この文章を書いている定年の年です。学科内事情もあるし、当初、何とかなるさと思って引き受けましたが、年ごとにひどくなる多忙化を甘く見ていたようです。生来の不徹底な性格が増幅されたのかもしれませんが、色んなことが不十分だったり間際まで決まらなかつたりで、学科と学部には多大なご迷惑をおかけしたと思います。この年度もまた忘れがたいものになるだろうと、いま漠然と感じています。

農学生命科学部にいる間に学部内改組があり、私はそれまでの生物生産科学科から、新しくできた生物学科に移りました。改組に伴って面白かったのは、学科の学生たちの質が異なることです。前学科の学生は、概して科学の応用的な側面に関心が高く、人間と他生物との関わりにも興味を持つ人が結構居たのですが、新学科では純粋に生物学志向の学生が多く、いわゆる「昆虫少年（少女）」も散見され、これも面白いと思いました。

何だか湿っぽい話も書きましたが、長年月にわたってお世話になった弘前大学と農学生命科学部には厚く感謝します。

2014年3月7日 記

## 定年退職教員からの寄稿～2



## 退職にあたって

石 黒 誠 一

平成10年4月に農学生命科学部ができた時に赴任し、16年が過ぎました。

赴任当時、講義は糖鎖工学や細胞制御工学を担当することになっていましたが、最初の頃は理学部の生物学特殊講義（細胞分化）や理学研究科の遺伝子工学特論なども担当していました。生物学特殊講義は集中講義で、アフリカツメガエルを受精させるところを学生に見せてから講義をスタートしました。講義室の隅に顕微鏡を置いて講義の合間に見てもらいたかったからです。2細胞、4細胞、8細胞と発生が進み、次の日には泳ぎだします。すでに大学に入る前に見たことのある人もあるかもしれませんが、何回見ても面白いものです。私は大学の講義は重要な論文をまとめて、それを紹介した方が本当の意味での面白さが伝わるものと信じていました。それには一つの講義に十分な準備時間が必要です。ところが、生物学をほとんど学んでこなかった学生にとっては難しすぎたのかもしれません。

改組があって、細胞工学から細胞生物学Ⅰという講義に名前が変わり、教科書を使うようになりました。その時から学生同士の討論を重視するようになりました。毎週、講義の前に5～6人の学生に研究室に来てもらい、授業でプレゼンテーションをする練習をしました。いわゆるアクティブラーニングの一種で、学生が教科書の内容を説明し、聞いている学生に質問してもらう形式です。大学2年生でこれをやるには相当苦勞しましたが、意外と学生の考え方は個性的で、何故かということを考えてもらうのには学生にとってそれなりに意味はあったと思います。それと、なにより私に

とっても生物学の問題を若い人と討論することは本当に楽しいことでした。

研究はずっと高等生物の網膜の研究を続けてきました。網膜のビタミンA代謝についてはほとんど進みませんでしたが、グルタミン酸代謝についてはそれなりの成果があったと思っています。特に、細胞内カルシウムイオン濃度の上昇によって劇的にグルタミン酸代謝酵素活性が変化し、アンモニアやグルタミン酸の上昇が抑えられ、ATP産生量が調節され、制御できなくなると細胞死へと導いていくという自分なりの考え方がまとまってきたと考えています。

研究室での生活は楽しいものでした。花見やソフトボールをやったり、深浦のセミナーハウスで夏の合宿セミナーをやったり、冬は鍋を囲んだりして研究室の皆が一緒に過ごせる時を大切にしてきました。実験はうまくいかないことが多いもので、お互いがなんでも気軽に話せることがとっても役に立ちます。大学の形はこれからも変わるでしょうが、大学の本当の価値は変わりません。大学は単に勉強しにくるところではなく、多くの人が集まって討論し、新しいものを生み出していくところにあると今でも強くそう思っています。



## 定年退職教員からの寄稿～3



## 大学の教員が学生の成長に出来ること

分子生命科学科 菊池英明

弘前大学に来るまでは、ほとんど一人で研究を続けて来たのですがここに来てからは、自分で実験をする時間を取ることはあまりできませんでした。少し寂しくはありましたが、学生が成長することを見ているのは、私にとっては楽しいことでした。研究する環境をなるべく整えることくらいしかできませんでしたが、それなりに学生は楽しんで研究をしてくれたように思うのですが、私の自己満足でしかないのかもしれないかもしれません。

私の研究分野は、学生時代に書いたヒストンデアセチラーゼの論文から出発しています。高等動物の遺伝子転写制御に関わる、クロマチン複合体を形成している因子の同定とその機能に関する研究です。遺伝子のエピジェネティックな発現に関する因子の研究は、ようやく成熟してきたので、医学研究との関わりも出てきて、その応用までも考えられるようになってきました。この10年の間にも、大きな展開がありその研究の流れに追いついていくことは到底できませんでしたが、そのなかでも学生達は自分が見つけたものを展開させて論文を残してってくれました。

学生の発想するものを、学生とのディスカッションを通して、実際に行う実験を構築し、それを実現するための材料をどのように調達するかということに多くの時間を費やしたように思います。そのために、私自身が構想していた実験プロジェクトを変更し、断念せざるを得ないこともありました。しかし、学生が自分で考えて持ってきた構想を、進めていく方が本人も満足することでしょうし、その責任も感じて積極的に研究に取り組んでくれていたように思います。そのことで、学生

が人間的にも成長してくれるように思いましたので、下級生の指導もなるべく指導する学生にまかせるという方針は守ってきました。それが上手くいくこともあります、上手くいかないこともあります、私の部屋で涙を流す者もいましたが、それも人生経験の一つとして別の方向性を示唆するだけに止めました。

人間の営みの中でも、知的な興奮をもたらしてくれる基礎研究は、本当に楽しいものであることを知ってもらえることができれば、それだけでも大学の教師としての役割は済むのではないかと思います。将来自分の生活の役に立つのか立たないのか分からないような実験を積み重ねて、その中で悪戦苦闘して自分で何かを見出したという小さな成功体験は、それだけのことを成し遂げたという自信を生み、社会に出た時の様々な局面で何がしかの役に立つのではないかと思います。将来役に立ちそうな資格や技術を教えるという教育もあるでしょうが、それよりももっと何か新しいものを発想し生み出していくような人材が、これからの日本にとってより重要なことなのではないかと思います。いずれにせよ、既に成熟の段階に入った日本の社会は、そのような若い活力が必要であり、彼らしかそれを担っていくことはできないでしょう。



## 定年退職教員からの寄稿～4



## 農学生命科学部設置の思い出

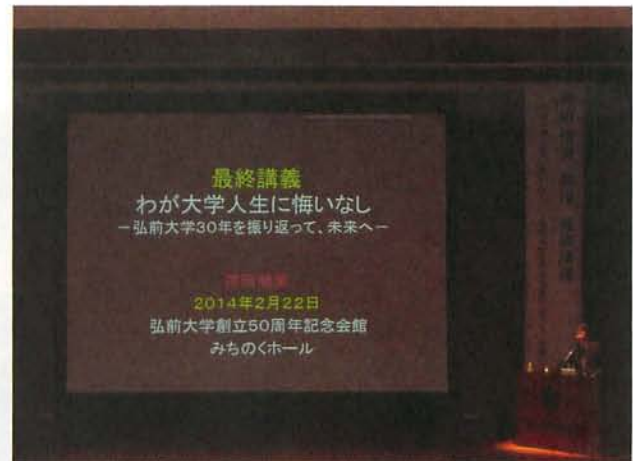
園芸農学科食農経済コース教授 神田 健 策

私は、1984年11月にそれまで勤務していた北見工業大学一般教育（助教授）から弘前大学農学部農学科農業経済コース（農産物流通論）助教授に採用され、専門科目として協同組合論と農業史を担当（その後、農産物流通論や国際農業論なども講義）することになった。教授の三國英実先生が1989年3月に広島大学生物生産学部へ転出されたこともあり、同年4月より教授に昇格した。この時期はまだ小講座制であったので教授昇格の機会が与えられたと考えているが、まだ40歳になったばかりのことであった。

今から振り返るとこの時期は、現在につながる大学改革の走りであった。国立大学はいわゆる大規模総合大学などの一部を除いて大半の大学は小講座制から大講座制へ改組となり、1990年4月、農業経済コースは農業生産流通学コース（大講座）として農業生産科学科内に組み込まれた。また、この時、岩手大学大学院連合農学研究科博士課程が創設され、本学部もその構成員となった。さらに1991年7月、大学設置基準の大綱化（授業科目の科目区分の廃止など）が施行され、一般教育（教養教育）の全学実施体制と教養部教員の配置換えによる学部再編が進められた。

しかし、教養部の再編は全国的には本学が一番遅れた。1995年10月新農学部（仮称）構想検討委員会が組織され、評議員3名、農学部5名、理学部生物学科5名の委員によって会議が頻りに持たれた。私は、当時、学部内外のいろんな委員を担わされた。連合大学院の設置構想に関する委員とその後、代議員、教養改革構想に関わる委員、そして先述の新農学部（仮称）構想検討委員会の委員などだった。

当時、「シャッフル」という言葉が日常的に使われ、理農融合など学問分野の混合が言われた。そのためいろんな長い名称が付けられたが覚えら



れそうにないのもあった。新農学部委員会では、理学部生物学科を農学部を受け入れて新学部とし、理学部を理工学部へ再編するという構想が提示された。構想案作成に残された時間は実質3ヶ月ほどで新学部構想が創り上げられた。文部省交渉が行われた結果、1997年10月農学生命科学部、理工学部が新設された。それまで本農学部は国立大学の農学部としては、一番最後に出来た小規模の農学部であった。しかし、新たな学部は生物学科が加わったことのほかに、教養部教員、応用生命分野の増員などが実現し、全国最低規模の農学系学部から中規模の新学部として発足することになった。新学部の農学生命科学部の名称は、欧米に Agriculture and Life Science の学部、学科名が見られることと韓国に同名の学部があることをたまたま知ったので、委員会での議論の末、採用となった。この時ほど大学改革にエネルギーを費やしたことはなかった。

その後、私は副学長（2002年2月～2004年3月）、理事（2010年2月～2014年1月）計6年2ヶ月務めることになり、本学部から離れることも多かった。2月22日の最終講義の題名は「わが大学人生に悔いなし」とした。

## 平成25年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成26年3月20日に、平成25年度の農学生命科学部卒業証書授与式および大学院農学生命科学研究科の学位記授与式が行われた。今年度の学部卒業生は182名、大学院修士課程修了生は39名で、農学部と農学生命科学部をあわせた卒業生は6,945名、研究科修了生は946名となった。

あいにくの天候のため、学部校舎玄関内ロビーにて記念写真撮影を行った。恒例の学部・後援会・同窓会共催の祝賀会兼同窓会歓迎会は、生協食堂が改修中のため学科・コースごとに学部校舎内の講義室などに分かれて開催され、恩師や友人との別れを惜しんだ。





本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各1名である）。

### 生物学科

(株) エコニクス、(株) ベニレイ、(株) キセキ東海、(株) 会津ゼネラルホールディングス、(株) 微生物化学研究所、大泉開発(株)、六花亭製菓(株)、Meiji Seika ファルマ(株)、サンマルコ食品(株)、みやぎ生活協同組合、千葉県公立学校、長崎県職員、平川市職員、弘前大学大学院(22)、大阪府立大学大学院、東京大学大学院、東北大学大学院

### 分子生命科学科

ゼリア新薬工業(株)(2)、(株) エシック、(株) 岩手銀行、(株) 北海道クボタ、丸大堀内(株)、日本ハム北海道販売(株)、公益財団法人茨城県水質保全協会、国立大学法人秋田大学、青森県商工会連合会、土幌町農業協同組合、北海道立高等学校、青森県公立学校、十勝総合振興局、青森県職員、江別市職員、札幌国税局、札幌市職員、函館市職員、弘前大学大学院(10)、北海道大学大学院、名古屋大学大学院、東京大学大学院、東北大学大学院、奈良先端科学技術大学院大学

### 生物資源学科

北海道システム・サイエンス(株)(2)、(株) クリニコ、(株) コメリ、(株) なか卯、(株) ホクビー、(株) みちのく銀行、(株) 岩手ホテルアンドリゾート、(株) 青南商事、(株) 池田、(株) 林牧場、カネショウ(株)、ゼリア新薬工業(株)、テスコ(株)、一般財団法人建設物価調査会、公益財団法人鷹揚郷腎研究所弘前病院、紅屋商事(株)、三菱商事フードテック(株)、東北日本ハム(株)、日本ホワイトファーム(株)、八戸缶詰(株)、山崎製パン(株)、福島信用金庫、防衛省・自衛隊、弘前大学大学院(8)、筑波大学大学院、東北大学大学院、北海道大学大学院

### 園芸農学科

自営業(3)、(株) アグリカルチャーセンター、(株) サンデー、(株) ダイユーエイト、(株) マエダ、(株) マシス、(株) 三佑コンサルタンツ、(株) 山本製作所、(株) 青森銀行、(株) 丹波屋、(株) 日本アクセス、JA全農北日本くみあい飼料(株)、アクセルマーク(株)、イオンリテール

(株)、インターファーム(株) フィールズ(株)、ホーマック(株)、公益財団法人栃木県農業振興公社とちぎ花センター、いわて生活協同組合、生活協同組合コープあおもり、北海道旅客鉄道(株)、岩手県職員、矢巾町職員、十和田市職員、深浦町職員、長野県職員、八田ファーム、防衛省・自衛隊、弘前大学大学院(5)、北海道大学大学院

### 地域環境工学科

東日本旅客鉄道(株)(3)、(株) エイティアイ、(株) コサカ技研、(株) コハタ、(株) サンデー、(株) マエダ、(株) 横山基礎工事、(株) 興和、(株) 農土コンサル、広尾町農業協同組合、農事組合法人 水鳥、北海道旅客鉄道(株)、奥山ボーリング(株)、青森県職員(2)、福島県職員(2)、黒石市職員、札幌市職員、豊浦町職員、千葉県職員、東北農政局、関東信越国税局

### <大学院農学生命科学研究科修了生>

#### 生物学コース

北央薬品販売(株)、レイス(株)、日糧製パン(株)、協同飼料(株)、(株) データベース、(株) カロリアジャパン、(株) 東日本放送、国立大学法人北見工業大学、青森県職員、札幌市職員、岩手大学大学院

#### 分子生命科学コース

WDBエウレカ(株)(3)、国立大学法人秋田大学(2)、タマ化学工業(株)、ベル食品(株)、宇都宮化成工業(株)、(株) アグリカルチャーセンター、(株) ハイテック、青森市職員

#### 生物資源学コース

WDBエウレカ(株)、弘果弘前中央青果(株)、岩手生物工学研究センター、道の駅ひろさき、青森県職員、岩手大学大学院(2)

#### 園芸農学コース

プライフーズ(株)、(株) ジャパンファーム、(株) シジシージャパン、生活協同組合コープあおもり

## 新任教員の自己紹介



加藤 千尋 助教(地域環境工学科)

2013年11月より地域環境工学科に着任いたしました。土壌が農業や自然生態系の基盤となることを念頭に、農地土壌中の水分・温度状態、ガス環境の予測や農地保全に関わる研究に取り組んでいます。農業を基幹産業とし、

また、白神山地や岩木山など多くの自然を身近に感じることでできる青森、弘前で教育・研究に携われることを嬉しく思います。今後、地域の現場に出向き、地域に関わる課題にも積極的に取り組みたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。

### 教職員人事

退職(定年退職) 平成26年3月末日

佐原 雄二(さわら ゆうじ)

教授(生物学科)

石黒 誠一(いしぐろ せいいち)

教授(分子生命科学科)

菊池 英明(きくち ひであき)

教授(分子生命科学科)

神田 健策(かんだ けんさく)

教授(園芸農学科)

退職 平成26年3月末日

鳥丸 猛(とりまる たけし)

助教(生物学科)(三重大学准教授に栄転)

採用(新任)

加藤 千尋(かとう ちひろ)

助教(地域環境工学科) 平成25年11月1日

### 事務局から

平成17-18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号(2005年6月1日発行)の10ページにあります。

同窓会ホームページ(<http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/>)からもダウンロードできます。

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。

## 会費納入と住所通知のお願い

平成25-26年度会費5,000円を、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。なお、すでに平成25-26年度会費をお納めいただいた会員には振込用紙を同封しておりません。

転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

### 同窓会事務局

〒036-8561 弘前市文京町3 弘前大学農学生命科学部同窓会

戸羽 隆宏 電話 0172-39-3786

E-mail ttakki@cc.hirosaki-u.ac.jp

松崎 正敏 電話 0172-39-3804

E-mail mma@cc.hirosaki-u.ac.jp

田中 和明 電話 0172-39-3816

E-mail k-tanaka@cc.hirosaki-u.ac.jp



## 平成25-26年度 同窓会総会報告

平成25-26年度総会が、平成25年7月13日15時から弘前市の弘前パークホテルにおいて開催されました。平成23-24年度事業報告および会計報告、平成25-26年度の事業計画、予算および役員案について、事務局より報告と提案がなされ、質疑応答の後、原案どおり承認されました。総会終了後には和やかに懇親会が行われました。

### 1. 平成23-24年度事業報告

H25. 2. 8 震災学生支援 (10万円、1名)

H25. 3. 22 卒業・修了生同窓会入会懇話会

#### (1) 平成23年度事業報告

H23. 6. 20 同窓会報第29号発行

H23. 7. 9 同窓会総会 (青森市: ホテル青森)

H23. 7. 11 全学同窓会会費 (14.8万円) の納入

H23. 10. 7 母校援助費 (47万円) 納入 (H22年分を含む)

H23. 9. 26 同窓会報の在学生家族への送付

H24. 1. 28 福島支部総会 (福島市)

(鮫島教員、工藤教員出席)

H24. 2. 18 秋田支部総会 (秋田市: イヤタカ)

(松崎教員・加藤教員出席)

H24. 3. 23 卒業・修了生同窓会入会祝賀会

#### <参考>

(平成25年度)

H25. 4. 8 震災学生支援 (10万円、1名)

H25. 6. 24 同窓会報第31号発行

H25. 6. 26 全学同窓会会費 (14.8万円) の納入

H25. 7. 13 同窓会総会 (弘前市: 弘前パークホテル)

#### (2) 平成24年度事業報告

H24. 6. 27 同窓会報第30号発行

H24. 7. 27 全学同窓会会費 (14.8万円) の納入

H24. 9. 27 同窓会報の在学生家族への送付



## 2. 平成23-24年会計報告

## 収 入

項目	項 目	H23-24年度 予算(案)	H23年度	H24年度	H23-24年度 決算	H21-22年度 決算	達成率 (%)	摘 要
A	繰越金	¥4,372,821	¥4,372,821	-	¥4,372,821	¥4,922,811	100%	
B	正会員会費	¥2,150,000	¥1,760,000	¥1,585,000	¥3,345,000	¥2,175,000	156%	計669名(H23は352名+H24は317名；ただし、うち2重払いが182名、すなわち実質669-182=487名)。 [参考] H19-20年：522名 H21-22年：435名
C	入会費	¥1,850,000	¥440,000	¥1,160,000	¥1,600,000	¥1,890,000	86%	計160名(H23は44名+H24は116名)。 [参考] H19-20年：240名 H21-22年：189名
D	利 息	¥3,000	¥814	¥610	¥1,424	¥3,054	47%	
E	振替手数料	¥-61,500	¥-44,060	¥-47,360	¥-91,420	¥-69,080	149%	寄附金納入者(58名)の手数料を含む。
F	そ の 他	¥407,500	¥390,000	¥7,000	¥397,000	¥99,000	97%	H23総会会費(¥106,000)、H23寄附金(56名より計¥284,000)、H24寄附金(2名より計¥7,000)。
	合 計	¥8,721,821	¥6,919,575	¥2,705,250	¥9,624,825	¥9,020,785	110%	

## 支 出

項目	項 目	H23-24年度 予算(案)	H23年度	H24年度	H23-24年度 決算	H21-22年度 決算	達成率 (%)	摘 要
1	会報発行費	¥2,650,000	¥1,293,938	¥1,392,960	¥2,686,898	¥2,602,189	101%	
2	卒業祝賀会費	¥900,000	¥478,100	¥473,150	¥951,250	¥892,850	106%	H21年分にはH20の集合写真代(15.9万円)を含む。震災によりH22年は卒業祝賀会をせず懇話会とした。
3	支部派遣費	¥150,000	¥129,110	0	¥129,110	¥102,000	86%	H21年に秋田県および福島県。
4	母校援助費	¥1,680,000	¥470,000	¥100,000	¥570,000	¥403,708	34%	H23年の47万円はH22年分(26万円)と23年分(21万円)の合計(環境整備費として使用)。 H24年分の環境整備費は未払い。 H24年の10万円は震災学生支援(1名)。 H23-24年の予算(案)には震災学生支援(100万円)を含む。
5	総会経費等	¥250,000	¥240,245	¥0	¥240,245	¥194,000	96%	
6	庶務・管理費	¥80,000	¥5,000	¥14,000	¥19,000	¥58,296	24%	
7	通信・印刷費	¥70,000	¥11,150	¥3,020	¥14,170	¥64,290	20%	
8	慶弔費	¥40,000	0	¥22,000	¥22,000	¥34,631	55%	
9	全学同窓会会費	¥296,000	¥148,000	¥148,000	¥296,000	¥296,000	100%	
10	予備費(繰越)	¥2,605,821	-	-	¥4,696,152	¥4,372,821	180%	
	合 計	¥8,721,821	¥2,775,543	¥2,153,130	¥9,624,825	¥9,020,785	110%	

平成25年7月1日

会計監査 氏名

齊藤 寛



## 3. 平成25-26年度事業計画

- (1) 総会の開催  
 (2) 役員会の開催  
 (3) 同窓会会報の発行 (第31、32号)

- (4) 支部活動への援助 (教員・役員の派遣)  
 (5) 卒業・修了生同窓会入会祝賀会  
 (6) 農学生命科学部への援助  
 (7) 全学同窓会への援助  
 (8) その他必要と認められる事業

## 4. 平成25-26年度予算

## 収 入

項目	項 目	H25-26年度 予算(案)	H23-24年度 実績	H23-24年度 予算(案)	前期比 (%)	摘 要
A	繰 越 金	¥4,696,152	¥4,372,821	¥4,372,821	107%	
B	正 会 員 会 費	¥1,340,000	¥3,345,000	¥2,150,000	62%	(例年450名程度-前期2重払い者182名=268名)×¥5,000.
C	入 会 費	¥1,850,000	¥1,600,000	¥1,850,000	100%	(185名×0.5×¥10,000)×2年.
D	利 息	¥2,000	¥1,424	¥3,000	67%	
E	振 替 手 数 料	¥-54,360	¥-91,420	¥-61,500	88%	納入予想(入会+定期会費=453名)×¥120.
F	そ の 他	¥100,000	¥397,000	¥407,500	25%	総会会費等の特別収入(10万円). H23-24年には寄附金分が含まれている.
	合 計	¥7,933,792	¥9,624,825	¥8,721,821	91%	

## 支 出

項目	項 目	H25-26年度 予算(案)	H23-24年度 実績	H23-24年度 予算(案)	前期比 (%)	摘 要
1	会 報 発 行 費	¥2,700,000	¥2,686,898	¥2,650,000	102%	年1回×2年分.
2	卒 業 祝 賀 会 費	¥951,250	¥951,250	¥900,000	106%	
3	支 部 派 遣 費	¥150,000	¥129,110	¥150,000	100%	
4	母 校 援 助 費	¥900,000	¥570,000	¥1,680,000	54%	H22-23年会費収入(494万円)の1割=49万円をH25-26年分として納入 + H24年未納入分(21万円) + 震災学生支援(20万円). H23-24年度予算(案)には震災学生支援(100万円)を含む.
5	総 会 経 費 等	¥250,000	¥240,245	¥250,000	100%	
6	庶 務 ・ 管 理 費	¥60,000	¥19,000	¥80,000	75%	H21-22年実績から算出.
7	通 信 ・ 印 刷 費	¥65,000	¥14,170	¥70,000	93%	H21-22年実績から算出.
8	慶 弔 費	¥40,000	¥22,000	¥40,000	100%	
9	全学同窓会会費	¥296,000	¥296,000	¥296,000	100%	¥148,000×2年
10	予備費(繰越)	¥2,521,542	¥4,696,152	¥2,605,821	97%	
	合 計	¥7,933,792	¥9,624,825	¥8,721,821	91%	

## 5. 平成25-26年度役員

役職名	氏名	勤務先	卒業年	教室名	*印新任
名誉会長	佐々木 長 市	弘前大学農学生命科学部長			
顧問	岩 井 邦 彦	元農学部同窓会長	32	土肥	
	豊 川 好 司	元弘前大学農学生命科学部長	38	畜産	
	高 橋 秀 直	元弘前大学農学生命科学部長			
	鈴 木 裕 之	前弘前大学農学生命科学部長			
会 長	三 上 巽	(株) 青森ケーブルテレビ社長	42	農経	
副 会 長	成 田 博	青森県農林水産部次長	53	果樹	
	泉 谷 雅 昭	津軽広域水道企業団事務局長兼津軽事業部長	51	水利	
	西 川 明 満	元青森県農協中央会	45	作物	
監 事	齊 藤 寛	元弘前大学農学生命科学部	42	土肥	
	岩 谷 健	青森県農協中央会	56	農経	
評 議 員	工 藤 啓 一	元弘前大学農学生命科学部	38	作物	
	工 藤 信 裕	元青森県庁	45	水利	
	菊 池 孝 夫	平川市役所経済部	52	作物	
	櫻 田 隆 夫	(株) 東北建設コンサルタント	52	造施	
	泉 完	弘前大学農学生命科学部	53	水利	
	蛭 名 正 樹	弘前市役所農林水産部	53	農地	
	古 館 行 雄	三本木農業高校	55	蔬花	
	工 藤 智	青森県産業技術センターりんご研究所	58	果樹	*
	奈良岡 馨	青森県産業技術センター弘前地域研究所	56	農利	
	天 内 洋 之	芝管工(株)	56	農機	
	三 浦 純 司	J A相馬	56	果樹	
	田 中 満	柏木農業高校	58	育種	
	駒 井 秋 浩	柏木農業高校	59	果樹	
	清 藤 文 仁	青森県産業技術センター農林総合研究所	59	生化	
	東 信 行	弘前大学農学生命科学部	62	生物学科	*
	加 藤 幸	弘前大学農学生命科学部	平4	造施	
	鳴 海 純	弘前実業高校	平6	果樹	
	山 本 晋 玄	青森県病害虫防除所	平11	植病	
	房 家シン	弘前大学農学生命科学部(金木農場)	平16	畜産(院)	
	福 田 和 光	大鰐町役場	平19	水利	
	濱 田 茂 樹	弘前大学農学生命科学部	平9	生化	*
総務幹事	戸 羽 隆 宏	弘前大学農学生命科学部	50	農利	*
情報幹事	松 崎 正 敏	弘前大学農学生命科学部	62	畜産	
会計幹事	田 中 和 明	弘前大学農学生命科学部	平15	植病(院)	

## 支部だより

### 秋田支部総会に参加して

秋田支部の総会が7月20日（土）秋田市「イヤタカ」にて開催されました。大学からは秋田支部からの要請がありました張 樹槐先生（農業機械学専攻）と事務局から工藤 明（総務幹事：農業水利学専攻）が出席致しました。支部長の松本 勤先生（秋田県立大学短期大学部名誉教授）の若々しい開会の挨拶に始まり、張先生からは学部全体の動向、工藤からは直前に行われました同窓会総会の報告等、続きまして会計報告と活動計画が説明され、了承されました。

この後、多分秋田支部のみが行っているプログラムだと思いますが、支部会員による講演会が行われました。今回は第2回目だそうです。秋田県農業試験場企画経営室長の松橋秀男氏（昭和58年作物卒）による「今、なぜアフリカ稲作振興か？」の演題で約40分、本人が行った海外協力の経験（約3年間）からアフリカにおける食生活の現状とお米の必要性を力説。アフリカで主に作付

けされている「ネリカ米」の話もお聞きし、大変勉強になりました（西アフリカの米消費量30kg/人・年もあることを知ってました？）。そして、お待ちかねの懇親会は三森一司氏（昭和49年土肥卒）乾杯の音頭で盛大に開催されました。酒どころ秋田の美酒を味わいながら、出席者22名のテーブルスピーチ（近況広告）で盛り上がり、旧交を温めた一夜でした。さらに二次会は「佐竹の殿様」さながらの肘掛けの付いた日本間の「さる酒所」で秋田の香りと風味を味わいました。

最後に、今年度の秋田支部総会の開催に当たりましてご尽力を頂きました松本支部長はじめ支部事務局の皆様、ご出席の方々に心からお礼を申し上げます。ただ、直前まで主体的に準備をして頂きました村上 章氏（昭和56年生化卒）にお会いできなかったのが残念でした。又今度お会いしましょう。

（文責：工藤 明）



記念撮影（1名の方未着）



松橋氏の講演に耳を傾ける支部会員

## 訃報

香 川 寛 元講師（植物病理学）  
 川 瀬 惇 農学科（畜産、S32卒）  
 武 石 和 次（旧姓 田中） 農学科（植病、S37卒）

上記の会員のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

